

る多元性が正当に捉えられるのであり、様々なレベルの共同体の意味が承認される。そうであるとするならば、厳密な歴史研究の手續きを放棄し、歴史を描くことを詩だと言い放つ態度からは恣意的な共同体理解ないし共同体形成が導かれる危険性が指摘されうるだろう。

シュペングラの例から確認されるのは、トレルチにとって保守革命的言説の問題点とは、歴史研究におけるディレッタントイズムによって歴史の範囲がナショナルなものへと限定され、その結果として現在の歴史的存在者の存立基盤としてナショナルな共同体のみが強調される事態であった。そして保守革命的言説の流行と右翼勢力の隆盛が関連していることが理解されるにつれ、それに抗するためには、危機に瀕している歴史主義からその良きものを救い出す必要性がより差し迫った課題として感じられたのではないだろうか。

トレルチにおける〈文化史〉の概念

塩濱健児

エルンスト・トレルチは、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活躍したドイツの神学者であるが、その研究は神学だけにとどまらず、宗教学、宗教哲学、歴史哲学、倫理学、宗教史、精神史、文化史、宗教社会学など広範で多岐にわたっている。そのなかで彼の〈文化史〉概念は独特の特徴をもち、彼の思想を形作る重要な一局面を担っている。本発表では、このト

レルチの〈文化史〉概念を明らかにしたい。

トレルチはかなり早い段階から〈文化史〉をみずからの歴史記述の方法として打ち出しているが、この〈文化史〉は、現代において流行しているような文化史とは異なる意味を有している。また、かつて一八・一九世紀頃に用いられていた「文化史」概念とも異なる意味合いをもっている。いまでもその文化史は何でもありの状況と化しているが、かつて「文化史」はいわゆる高尚な文化を対象とするものであった。トレルチの〈文化史〉概念は、ブルクハルトに代表されるような「文化史」に近いものではあるが、それとはまた異なる特徴を帯びている。

トレルチは種々の思想から影響を受けながらも、それらを批判的に受容して〈文化史〉概念を醸成していった。端的に言うところ、トレルチの〈文化史〉的方法とは、さまざまな相互作用を把握し、複雑な「相関関係」を捉える手法であるが、大きく「歴史学的方法」と「社会学的方法」に分けて考察することができる。「歴史学的方法」は、「歴史学的批判」、「類推」、「相関関係」という三つの本質的な原理にしたがうものであり、トレルチは教会史やキリスト教の枠内だけで捉えていこうとするやりかたを独断的 (dogmatisch) であると判断し、より広い視点、すなわち宗教史、〈文化史〉という枠内で捉えていこうとして、いままではなされてきた方法に問題を提起した。トレルチは学問の分野においては、一般性をもち、すべてに適用可能な「歴史学的方法」を適用することを求めた。

さらに、トレルチは「歴史学的方法」を徹底していく際に、その「相関関係」を把握する方法が一面的にならないように

「社会学的方法」を取り入れた。このような視点を取り入れるきっかけとなったのは、マックス・ヴェーバーであったが、そこからマルクス主義的な理論をどう扱うかがトレルチの思考を捉えた。トレルチはこの理論を批判的に取り入れ、偏った一面的な歴史研究のあり方に反対し、多元的な歴史の構想を主張した。トレルチは社会学的な方法を導入することによって、時代を形作る様々な構成物の相互関係を捉えようとした。つまり、トレルチがもつ複雑な思考に、さらに社会学的な視点が入り入れられることによって、彼の「文化史」的方法はますます複雑さを帯びるようになったといえる。

トレルチは「歴史学的方法」に、さらに「社会学的方法」を取り入れることによって、単に精神性の高いものを捉えようとしただけでなく、現実的な側面にも目を向け、およそ人間の営みすべての相互関係を捉えようとした。このような態度がトレルチ独自の「文化史」概念を形成し、従来の「文化史」とは異なった視点を生み出した。トレルチの有名な、当時の通説を覆す近代の開始についてのテーゼや、かの浩瀚な『キリスト教教会と諸集団の社会教説』はこの産物であるといえる。

トレルチの「文化史」概念は、彼が最晩年に集中的に取り組んだ「歴史主義の問題」にも連なるものである。トレルチの「文化史」概念を繙き、トレルチが実際に描いた「文化史」を明らかにすることは、トレルチの思想を解明する上で、重要な課題であるといえるだろう。

「ユダヤ人イエス」と近代ドイツ

久保田 浩

伝統的な「イエス」像を規定してきた教会的教義の信憑性が揺らぎ始める啓蒙期以降、「キリスト・イエス」に代わる「史的イエス」への模索が「学問」という装いで為されるようになっていく。本発表では、「学問性」を標榜しつつ「イエス」を「ユダヤ人」として言語的に表象する営為(ユダヤ教史家ヨーゼフ・クラウスナーと宗教史家ヤーコプ・ヴィルヘルム・ハウアーの「ユダヤ人イエス」像)を行為遂行の実践と捉え、一九三〇年代ドイツにおける宗教史的現象と看做し、「イエス」の「ユダヤ人」性は当該の時代の宗教的・文化的情况への実践的関与の為に創出された文脈であるという観点から論じる。

クラウスナー『ナザレのイエス』(一九二二年。原著はヘブライ語。独訳第一版一九三〇年、第二版一九三四年)は「イエス」研究の目的を、ユダヤ教的護教論によって歪められてきた「イエス」像を批判し、第二神殿期の政治的、経済的、精神的情况から「イエス」を説明することであると述べる。そして、「ナザレのイエス」は厳格な倫理規範を説いた「ファイリサイ派のラビ」であると結論付けられる。しかしクラウスナーは「民族的ユダヤ教」と「誇張されたユダヤ教」(「イエス」の倫理規範とそれに基づく「キリスト教」という対立図式を立て、後者は実現不可能な程に極度に理念化された倫理規範に基づいており、「民族」にとって危険極まりなく、「民族生活の破滅」